観点からいえば、聖書ヘブライ語変種、ミシュナー[307]・ヘブライ語変種[308]、ミドラーシュ・ヘブライ語変種などのヘブライ語や、聖典や儀礼に関わるアラム語は「聖なる言語」と捉えられていた[309]。他方、スラヴ語の要素は、古くに借用されたチェコ語や古ポーランド語の語彙から、より後の時代に借用されたウクライナ語やロシア語まで、イディッシュ語に幅広く取り入れられているが、一般的にいって、どのスラヴ語が起源かを同定することは困難で、「スラヴ語」という一般的な言語範疇以上は確言できない場合が多い。最後に、「国際言語」的な語彙は、多くの近代諸語で取り入れられているフランス語、ラテン語、古代ギリシア語などに基づく新造語などの単語で、イディッシュ語にはドイツ語、ロシア語、ないし英語経由で借用されたものである[310]（Harshav, 1990: 5-8, 27-31, 43, 66-79）。

ヘブライ語イスラエル変種の誕生（1）：言語純粋主義と混淆的コイネー化――子音と母音の音韻体系

以上、上で見たヘブライ語アシュケナジ変種の3つの類型、すなわち①理想的、②口語的、③論議的、これら3つの類型のうち、①「理想的変種」以外、つまり③「論議的変種」、そして特に②「口語的変種」に深く関わり、混淆的言語様態を生み出しているイディッシュ語――そして、さらに、それ自体が極

---

307 周知のように、イエスの時代のユダヤ教には、①トーラーに依拠する律法主義を唱え、都市エリート層の学者階級であったファリサイ派、②同じく都市エリート層で、エルサレムの第二神殿での祭祀を中核とした祭司階級であるサドカイ派、そして、③洗礼者ヨハネやイエスなどがその中から現れたと推察しうる、荒野で信仰を実践したエッセネ派が存在した。上記、2つの宗教的エリート層の間では、第二神殿の破壊は、ユダヤ教における（エルサレムの第二神殿から遠く離れたバビロンへの捕囚などの離散によって既に高揚していた）律法の重要性をさらに増し、書かれた律法に関するさまざまな議論、つまりトーラーについての口伝の注解や議論――ミシュナー――を習得していることがラビの本質的な要件となることに繋がったとされている（臼杵、2020: 80, 84, 89）。

308 巻末注50参照。

309 小山・浅井（2022: 23-31）参照。

310 小山・浅井（2022: 210-235）でのイーヴン=ゾーハーに関する記述を参照。

めて混淆的な性格を持つ言語であるイディッシュ語――について概略を述べた。そのようなイディッシュ語と交錯する口語的変種や、それを部分的に含み込んだ論議的変種に見られる混淆性や多様性は、神聖で純粋、且つ厳密な書記的ヘブライ語、聖書ヘブライ語への回帰を望む原理主義者シオニストのイーミックな視点からは、逸脱、変態であると――そして同様に逸脱的で変態的、ルーズで不合理な離散ユダヤ人の行動を類像的に映し出す言語使用の悪弊、病理であると――解されたことは想像に難くない。

さらに酷いことに、ラビやハシディーム（ハシド派信徒；2章参照）の用いた書記ヘブライ語変種は、論議的変種の影響を示し、しばしばヘブライ語の文法的規範からの逸脱さえ示していたのである。（キリスト教圏における、近代人文主義による中世スコラ的ラテン語に対する同様の批判を想起したい。）また、ヘブライ語の単語のジェンダーも、ヘブライ語を借用し取り込んでいた口語であるイディッシュ語の影響下、変更されていることが頻繁であった。たとえば、アシュケナジの作家、ヨセフ・ペルル（Yosef Perl, 1773～1838年; Manekin, 2015: 196）が、若き日には自ら信奉していた神秘主義的なハシド派を啓蒙主義の観点から批判した、反ハシディームの諧謔的な文芸作品であり、ヘブライ語による近代小説の嚆矢であるともいわれる『セフェル・メガレー・テミリーン（秘密の開示者）』（*Sefer Megale Temirin*, 1819年）などに見られるように、ハスカーラー（ユダヤ啓蒙主義）の作家たちは、ハシディームの混淆的な書記変種を、皮肉なパロディーの標的とし[311]、そこに聖なる言語であるはずのヘブライ語の堕落を見出したのである。そしてシオニズム運動は、二千年の時を飛び越え純然たる聖書とその時代に回帰しようというその熱い願望のゆえに、このラビやハシディームの混淆変種に対するユダヤ啓蒙主義の嫌悪を継承することになった[312]。

---

311 話者による揶揄の標的となる社会集団やその言語使用と、他方、話者自身の集団やその言語使用との間の社会的距離を指標する皮肉／アイロニカルな引用、その社会言語学的な原理については、それを、バングラデシュ／シレット移民を標的とした在英インド／パキスタン系二世による「クロッシング」（crossing）と呼ばれるコード・スイッチングを例に論じている第5章を参照。

312 一般に、ユダヤ啓蒙主義は、シオニズムおよびユダヤ教改革派の抬頭に繋がっ

周知のように、ユダヤ啓蒙[313]の泰斗たるモーゼス・メンデルスゾーン[314]（1729～86年）によって最初に最も辛辣に描かれたステレオタイプ、すなわち、イディッシュ語は文芸的な近代ドイツ語などとは対照を成す歪んだ醜い言語であり、そこには、離散ユダヤ人の魂の歪みが類像的に映し出されている、などといった偏見は、必要な変更を少し加えれば、聖書ヘブライ語と対照化されたアシュケナジ・ヘブライ語についても妥当する。すなわち、アシュケナジ変種に対する反感は、ユダヤ人の離散／ディアスポラ状況に対する嫌悪感、母語であるイディッシュ語に対する愛着と共にある嫌悪、近代資本主義の展開から取り残されたユダヤ人の小商いと怠惰によって腐食された東欧のユダヤ人居住区域の中のシュテットル（ユダヤ人の小規模コミュニティ）に住む親たちやその家に対する反撥感、スコラ的で、現実社会から遊離しているように思われたタルムードの研究や、ハシディームの不合理で原始的な行為・振る舞いなどによって彩られた祈祷の世界に対する敵意、それらと相同ないし等価であり[315]、実際、両者は概ね一体化されていたようである。

そのようなイデオロギー的共示や社会指標性を備えたアシュケナジ変種では

た点にその重要性を持つとされている。たとえばユダヤ啓蒙主義は、世俗的な教育を推進し、聖書ヘブライ語を日常的な言語（俗語）としても活用しようとする動きを内包していた点においてシオニズムの先駆となったが、それに加え、18世紀末葉から19世紀初頭にかけてドイツで抬頭し、その後、アメリカで活況を呈することになったユダヤ教改革派にもユダヤ啓蒙主義の遺産は継承されている。改革派には、ヘブライ語ではなく地域の俗語の典礼での使用、オルガンや合唱隊などの典礼への導入、シナゴーグでの男女隔離の撤廃、女性のラビの任用、などといった点において近代・啓蒙・プロテスタント主義的な特徴が顕著に看取されることに注意したい（臼杵、2020: 174, 178-181）。

313 メンデルスゾーンや、その他の初期のマスキリーム（ユダヤ啓蒙主義者たち）が、実は、①「今ここ」でのコミュニケーションが単にメタ語用的注釈の連なりの最後の1つ、類像記号の連鎖の最後の1つにすぎないような非近代的なエピステーメー（小山・浅井、2022）と、他方、②進歩主義的な世俗化とその分身である反近代主義から成る「今ここ」中心の近現代的エピステーメー、これら両者の過渡的な混淆的空間の中にあったことについてはSchatz（2015）などを参照。

314 巻末注51参照。

315 等価性については小山・浅井（2022: 第1章）参照。